
Lost the Key

下弦 鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost the Key

【Nコード】

N6053D

【作者名】

下弦 鴉

【あらすじ】

『Lost the Key』。それは、失われた『鍵』。人の『心の扉』を開く、唯一の『鍵』。貴方には、ありますか？失くしてしまった、大切な『鍵』が。これは、そんな『鍵』を探す物語。忘れてしまった何かを取り戻す、そんな物語。

俺の名前は、風海^{かぜみしゅん}春。どこにでもいる、普通の中学生だ。

「春！まったなあ！！」

「ああ、じゃあな」

中学生と言っても、一年とかじゃない、もう受験生だ。

そんな俺の悩みは一つ。

どうやったら、この世をされるのか。

ただ、それだけ。

俺は、この世界に飽きていた。いや、嫌気が差していたのかもしれない。進歩だけを望み、国民を見ない政府。未来の事だけを考える、くだらない親。その全てに、何の関心ももてなくなった。だから、俺はこの世界から、早く解放されたかったんだ。

あんたらだって、思った事はあるんじゃないのか？こんな世界、大嫌いだ。この世界にいる意味なんて、ないんだ。

絶対ないって言いきれぬ奴、いないと思う。心のどこかで、絶対にこの世界に失望するからだ。

汚いこの世界に、いる意味なんてない。そう思ってたんだ、あの人物と、出会ったまでは。

家に帰る途中の道。そこは人通りも少なく、夜はよく、引つたくりがある。

そんなのが当たり前な道を、一人静かに俺は歩いていた。そりゃ、周りに誰もいないんだから、静かで当たり前だ。だけど、今日は少しだけ、様子が違った。

まだそんな季節でもないのに、霜が降り、霧も出て、寒々としてい。周りにあるはずの民家や、ミラーさえも霞んで見えるほどに。

「……何だよ、気味悪いな」

そんな愚痴をこぼしながら、俺は歩調を速めた。怖いわけじゃな

い、本能だ。本能が、ココは危険だと告げている。この場所を、早く去れと。

「……誰か、いる？」

そんな俺の霞んだ目の先に、ゆらゆら揺れる、人影があった。その影は、全身真っ黒だ。何故分かったかだつて？そりゃあ、白い霧の中にいれば、当然黒は目立つたる？

そんな黒い影は、やはり揺れながら俺に近付いてくる。咄嗟に引き返そうかと思つたが、足がそこに縫い付けられたかのように、動こうとしない。畜生、こういう時に、仕事をサボるなよ、足。

「まあまあ、そんなに慌てないでください。危害を加えるつもりなど、さらさらありませんから」

ム力つくほどにのんびりとした声は、この霧の中に良く通つた。そして目の前に現れたんだ、あいつは。

「……誰だよ、テメエ」

「怪しいものではないのは、確かですよ」

ニツコリと笑つた気配がした。本当にそれだけしか、分からない。前身黒でまとめられたスーツは、ほっそりとしたそいつに良く似合、目深に被つたシルクハットのせいで、表情が読めない。いや、読ませないのか。

「貴方に、お渡ししたいものがあつて、ここに来ただけです。他に用は、ございませんよ」

そう言つて、右手に持つた、少し短いステッキをもてあそぶ。

「ああ、そうです。一つ言い忘れました。そのお渡ししたいものは、ご自分で探してもらわないと」

何か落としたものがあつたかと探し回っていた俺は、その動きを止めて、目の前の男を睨む。渡したいものを、その持ち主に探させる？どういう意味だ？

まだステッキをもてあそびながら、彼は少し笑つてから言つた。

「混乱して当然ですね。だつて失くしたものは、『鍵』ですから」

「鍵？家の鍵なんて、俺は持つてねえぞ」

薄く笑って、男はステッキを左手に持ち替えた。

「ふふ、そう思っても、仕方ありませんね。私が貴方にお渡しするその『鍵』は、普通の鍵じゃないんですよ。特別な、『鍵』なんです」

やけに鍵を強調して言った。それほど大切な鍵を、俺は持っていただろうか？

「考えても、その『鍵』は浮かばないと思いますよ」

また面白そうに男は笑って、コツンと、左手で持っていたステッキで地面を叩いた。やけにその音は、この場に響いた気がした。

「私が持っているものは、記憶の『鍵』なんです」

「……記憶の、鍵？」

「はい」

そう短く答えた男は、また嬉しそうに笑った。そう分かったのは、白く細い口の両端が、上へと引き上げられたからだ。

だが、そんな事は関係ない。記憶の『鍵』。それが問題だった。俺は、これまでたいした事故もなく、健康的に生きてきたつもりだ。失くした記憶なんて、ないはずだ。それに、それと鍵とは、何の関係もないじゃないか。記憶喪失だなんて、一切ありえない。

「貴方が思っている事、全てが現実とは限りませんよ？」

そう言って、彼はまた笑う。なんだか怖くなってきた。だが、役立たずの足は、まだ復旧のめどがない。

「だから、さっきから言っているでしょう？そんなに恐れずともいいと」

そう言われて、『はい、そうですか』と簡単に行動を起こさなくする事など、絶対できない。それに、あんなにニコニコされていたら、逆に怖くなるんじゃないか？

「……そろそろ本題に入りましょう。私もこう見えて、結構忙しい身なので」

また微笑を湛えて、ステッキをいじる。黒曜石のように滑らかに光るそれは、彼のお気に入りなのだろうか。いつもいじっている。

「貴方は、今、この世界に飽きれていますね？」

単刀直入に、自分が思っていた事を言い当てられ、俺は言葉に詰まった。声が、言葉が紡ぎ出せない。

「そんなに驚かないで、スマイル」

そう言つて、黒い手袋をつけた手で、俺の頬に触れ、無理矢理笑顔を作らせた。

いつの間にもこんなにも近付いてきたのだろうかと思つていたら、また、元の距離に戻った。さっきのは、なんだったんだ……？

「では、もう一度、問います。……素直に答えてくださいね？」

そして、さっきの質問を繰り返した男は、器用に指先でステッキを回す。それを見ながら、俺は軽く頷いた。

「では、貴方はこの世界に生きている意味がないと、そう思っている訳ですね？」

何かの魔術なのだろうか、あの口調、ステッキの動きに、不思議と見入らせられる。

再び俺は、無神経に頷いた。

「これで最後です。貴方は、もうこの世界にいる意味がない、死ぬの。そう思っていましたね？」

「……ああ、こんな世界に生きてても、何の意味もない。俺がいて、嬉しい奴もいないだろうからな」

自然と、口が動いて、心の奥の言葉を紡ぎだした。何故、この男にこんな事を、しゃべってしまったら？疑問が頭を埋め尽くす。

そんな焦点の合わない、ずれたレンズの先で、また男は笑つていた。それにしても、本当に良く笑うな。

「やはり、貴方の『鍵』だったようですね。さあ、貴方の失くした『鍵』を探さなくては。あなた自身の力で」

「……失くした、『鍵』？」

「そうです。『鍵』です。その『鍵』は、とても大切な、大切なもの」

「……大切な、もの」

「さつきも言いましたでしょう？記憶の『鍵』だと。それは、忘れ去られてしまった記憶を開く、唯一の『鍵』」

「……」

「貴方には、忘れてしまった『記憶』があるのです。そして、それを閉ざしている『心の扉』を開くには、『鍵』が必要なのですよ」

「……信じ、られねえな」

「ふふ、そうでしょう。でも、それでいいのです、貴方が正常な証拠ですから」

返す言葉もなく、ただ突っ立っているだけの俺に、男は最後と言ったのに、もう一つだけ、問うた。

「貴方は、失われた『鍵』を、探しますか？」

自然と耳に入り、解読された言葉に、俺はなぜか頷いていた。本当に、何故頷いてしまったんだろう？

男がまた、霧に紛れながら言う。

「では、失われた『鍵』が見つかる事を祈って」

最後に、耳障りなステッキが地面を叩く音が聞こえ、俺の思考回路は、運転を中止した。

*

気が付いた時、俺は真っ白な道路に倒れていた。どこもかしこも真っ白なその世界に、俺はいた。

「……なんだ、ここ」

思わず出た疑問に、答える声はない。静か過ぎるその空間に、俺はたった一人で立っていた。どこに連れ去られたのか、定かじゃねえが、ココは元の世界と違う気がする。そんな事言っつの、変だとは思うが、そう思った。

「何をしているのです？探さないのですか、『鍵』を」

どこからか、あの男の声が聞こえる。現れた時のように、姿はない。真っ白な空から、その言葉は降ってきているようだった。

「早く探さないと、『鍵』を手に入れる機会を、失う事になりますよ?」

「何の事だよ!」

怒鳴らないと聞えないような気がして、空に向かって叫ぶ。なんだか、自分が馬鹿らしく思えた。

「『鍵』の事……では、ないですよね?」

「当たり前だろ!? 機会を失うって、どういう事だよ!」

「はい、単刀直入に言いますと、ここは生身の人間が長時間居ていい場所ではないのです。ですから、1時間以内に『鍵』を探し出さなければなりません」

「生身の人間? 1時間以内?」

「私は特殊な身ですから、何時間、何年居たとしても、問題はありません。ですが、この『記憶の世界』は、普通の人間が居ていい場所ではないのです。ここは、寝た時に見る、夢のようなものから」

「だったら、お前が探せばいいだろう?」

「私じゃいけません。もし、私が貴方の『鍵』に触れてしまったら、もう二度と、『鍵』は手に入らなくなります」

「何だよ!」

「『鍵』とはつまり、『人の記憶』のようなもの。人が勝手に触れているものではありません。見てもいけないのです。ですが、見つける事はできます。だからこうして、『鍵』の持ち主を探し、その『鍵』を見つけさせるのです」

「だったら、その『鍵』とやらがある場所を教えろよ!」

「それはできません」

「んでだよ!」

つくづく人を怒らせる事が好きな奴らしい。説明の言葉が、あまりにも足りなさ過ぎる。

「自ら見つけるからこそ、『記憶の鍵』なのです。他人は、手出しできません」

「もし、お前の力を借りたら、どうなるんだよ？」

「『鍵』は消滅し、貴方の『記憶』も、消滅します」

「つて事は、思い出す事は、もう二度とできねえつて事か？」

「はい、その通りでございます。そして、一度失われた『鍵』は、戻らない為、私と会った事も、貴方は忘れるでしょう」

「……」

「さあ、考えてる暇なんて、ありませんよ？おしゃべりが過ぎてしまいました。あと、40分弱しかありません」

「それを早く言え！」

「問われなかったので、聞く必要はないのかと」

「……ちっ」

これが舌打ちせずにいられるだろうか。知っていながら言わず、問われなかったから言わない。ふざけてる、この世界も、あの男も。

「ああ、一つ言い忘れていました。……いや、二つですね」

「んだよ！こっちは急いでんだ！」

走りながら問う俺に、冷やかな声は降ってくる。まるで、みぞれのようだ。冷たく、ゆっくりと体を冷やしていく。まさに、今のあの男のしゃべり方そっくりだ。

「いや、失礼。……早速言いますと、一つ目は、『鍵』は普通の鍵とは違うのです。だから、道端に落ちてたりする事はないのです。ある、特定の場所にしかありません。その場所に行けば、きっと『鍵』は見つかるでしょう」

「で、二つ目は!？」

「二つ目は、『鍵』を見つけたら、自分の胸に抱いてください。そうすれば、『心の扉』は開かれますから」

「それだけか？」

「はい、以上です。では、『鍵』探し、頑張ってくださいね」
それきり降ってくるみぞれは、ピタリと止んだ。

あてもなく走り続けていた俺は、もう諦め始めていた。絶対に見つけなくてはならない訳ではない、『鍵』。なのに何故、俺はこんなに必死になつてそれを探してんだ？

「おい、どこぞの男！」

「……それは、私の事ですか？」

「そうだよ、名のらなかつたんだから、適当な名前でもいいだろう？」

「……」

返事をしなかつたのは、肯定だろうか、否定だろうか。

でも、今は、そんな事関係ない。聞きたい事が、一つだけ生まれ
た。

「もし、お前が言う『鍵』とやらが見つけれなかったら、俺はどうなる？」

「どうなるも何も、記憶が失われるだけです」

「それって、ヤバイか？」

「ヤバイ？……ああ、いけない事かと申すのですね。はい、そうですね。失われた記憶は、封印され、もう開かれません。『鍵』が失われるんですから」

「……思いたさねえと、いけねえ事なのかよ」

「人それぞれですね。ですが、貴方の場合は、思い出していただく
かなくては困ります」

「んでだよ」

「死んでもらうては、悲しむ人がいるからです。……おっと、言い過ぎました。今度呼ばれるときは、『鍵』が見つかった時がいい
ですね」

そうして、男はいなくなつたようだ。何度叫んでも（例え汚い言葉
を吐いても）、返事がなかつたからだ。

死んでもらうては、悲しむ人がいる

そんな訳、あるもんか。だって俺は、親からの愛情なんて、ちつとももらわずに生きてきたし、友達だって、心からのものではない。ただ、一人が怖いから、付き合ってるだけだ。親だって、俺が死んでやった方が、生活が楽になって、幸せになれるだろうし。

俺の家は、12人家族だ。曾婆さんも、爺さんも、両親とも健全だから、それだけで6人。そして、子供も6人。俺が次男で、長男が一人、俺の下に、双子が一组、長女が一人。元々フラついていた長男は、いつの間にか家を出て行って、ロクな収入はない。だから突然帰ってきたと思ったら、家の金をかっぱらって、勝手に去っていく。双子は双子で手がかかる。いつぺんに小学校に入学した為に、学費もギリギリ払える程度。一番下の長女に至っては、まだほんの赤ちゃんだ。何もできるはずがない。

だから、お袋が面倒を見て、親父が働きに出てる。中学に通ってる俺が居なくなれば、少しは家の事になるんだ。だから、俺がいなくなれば、家の奴らは喜ぶはずだ。無駄な金を使わずにすむって。そんな奴らが、俺の為に泣く事なんて、あるのだろうか。

そんな事を考えながら、走り続け、道に迷った。右に曲がるか、左に曲がるか。はたまた直進してみようか……。

「……あれは……？」

真つすぐ前を見つめてみると、この白い世界で始めて見る、色があつた。……アレは、……病院だろうか？

何故だか、それに引き寄せられるかのように、俺の足は進んでいく。この足、また命令に逆らいやがって。なんて思いつつも、そこへ行ってみたい気がした。

「……どこかで、見た事があるような気がすんな」

それは、どこにでもあるような、こじんまりとした病院だった。お年寄りでも段差を気にしなくていいように、階段の横にスロープがある。そして、少し行った所に、ガラス張りの入り口がドンと構えていた。丁寧に並べられたイスやスリッパが、ここからでも見える。靴をしまえるように備えられた、靴箱も。その先に、何か輝く

ものが見えた気がした。

はやる気持ち、無理矢理抑えつけて、階段を一段抜かしに登り、震える手で扉を開く。何故、あの時手が震えていたのか、今も俺は分からない。

扉を開けるとすぐに目に飛び込んでくるのは、長いす。そして、その上にある、輝く『鍵』。

その鍵は、金色の光を放ち、宙に浮いていた。といっても、少し浮いている程度で、プカプカと浮いている訳ではない。普通の鍵とは違って、綺麗な装飾が施されている。差し込むところは、昔の鍵、そのものだが、握る所は、蔦が複雑に絡まったような模様だ。それは心なしか、ハートの形をかたどっているように見えた。

「……これが、『鍵』なのか？」

「そうですね、さあ、早くその『鍵』を使って、心の扉を開いてください。時間がありません」

「時間？」

「前にも言ったでしょう？もう、お忘れになったのですか？」

「忘れたよ！早く言えよ！」

白塗りの天井に叫ぶ俺の姿が鏡に映って、馬鹿みたいに見えた。

「ここは、夢のような世界、生身の人間が居ていい所ではありません。早く現世に帰らなくては、この世界に閉じ込められてしまいます」

「おい、後の方の事、聞いてねえぞ！！」

「言い忘れていました、すみません」

本当に謝っているのか、疑問に思いながら、長いすの上の『鍵』をそっと手に取る。ほんのりと暖かいそれは、手にとってもまだ宙に浮いているようだった。

「さあ、『心の扉』を」

「分かってるよ！」

ごくりとつばを飲み込み、両手で暖かな『鍵』を包み込む。両手の暖かさが、全身に伝わるようだ。そして、ゆっくりと胸元に近付

ける。

『こんな事で、扉なんか開くのかよ』

そう思った時、頭の奥で、何かが開く音が聞こえた気がした。

カチリ

「さあ、思い出してください。大切な、思い出ですよ」
男の声が、遠くで響いた。

*

「……ここは、どこだ？」

ゆっくりと間を開いた時、俺は、まだあの病院にいたかと思っていた。だが、場所は違っていった。

古ぼけた、黄ばんだ壁。粗雑に置かれた家具。散らかったおもちゃ。つぎはぎだらけのカーペット。……ここ、見た事あるような。

「しつかりして、どうしたの!? ねえ、返事をして!」

ふすまで閉じられた部屋の向こう側から、女の人の声がする。…

…あの声は、……お袋?

「返事を、返事をしてよ!」

ふすまを開けようとした時、他の手が通過した。言ったとおり、その手は俺の手を貫通した。空気のような俺の手は、その手には何の影響も与えていないようで、その手は迷わずふすまを開ける。親父だった。

「どうした？」

「……しゅ、春の様子が、おかしいの」

開いたふすまの先に、苦しそうに呼吸する子供の姿が見えた。

……嘘だろ? ……アレ、俺じゃねえか?

今の面影が全くない、丸っこい顔が見える。それは頬をリンゴの

ように染め、急スピードで心臓を働かせていた。

「春、春。どうしたんだ？」

親父が心配そうに小さな『俺』を抱き上げ、汗ばんだ額をそっと撫でる。まるで自分がそうされたようで、ちよつとだけ額をさすった。

「熱がある。昨日はあんなに元気だったのに……」

親父が眉をひそめ、苦しげな表情をした。お袋も、同じような表情で、苦しそうな『俺』を見つめる。

「……まだやっている病院があるかもしれない。急いで春を連れて行こう」

「……でも、お金が……」

「借金でもすればいいさ。金なんて、こいつの命に比べりゃ、何の価値もねえ」

……俺の心に、その言葉が響いた。

お袋が身支度している間に、親父は『俺』を抱えて、「大丈夫。大丈夫」と言い続けていた。今の親父の面影がない、優しい瞳で、心配そうに……。

「さあ、早く行きましょう」

「ああ。……春、もう少しだからな、もう少しで、楽になるからな」

今の面影がない、優しい両親は、今、そこにいた。俺の目の前に、当たり前のように。

何軒も近くの病院をあたったが、どこもやっていなかった。やっている所もあったが、急患は受け付けられないと、追い返されてしまった。こんなに必死で、こんなに一生懸命な両親は、見た事なかった。

「お願いします！突然苦しみだしたんです！どうしたらいいか、分からなくて……お願いします、この子を診てやってください！！」

「……すみません」

「昨日まで、庭で跳ね回ってたんだ。けど、急に熱出して、寝込んでしまった。どうしたら助けてやれるか、わからねえんだ。頼む、俺らの子を、助けてやってくれ」

「すみませんが、私の専門分野ではないので……」

「そんな冷たい事言わないで、助けてくれよ、頼む、金はいくらでも出すから」

「……そんな事言われなくても」

「お願いです、お願いです　　！」

無残にも、扉は閉められ、光は消えた。

そんな光景を見て、何故だか妙に心が苦しい。何かで締め付けられているような、そんな苦しさだ。

どうしてだ。俺は、何で泣きそうなんだ……。

「それは大変だ、さあ、その子を私に……」

「お願いします、先生！この子を、春を助けて」

やっと見つかった病院の医者にすがりつくお袋は、止まらない涙を気にせずに、必死に医者に頼み込んでいた。その隣で、親父も深々と頭を下げていた。

何で、俺の為にこんなに一生懸命になってんだ？今は、あんなに冷たくて、非常なやつらなのに……。どうして、俺なんかの為に。

「大丈夫だよ、母さん。きっと、春は大丈夫だ」

聞いた事のない、優しい親父の声がする。待合室で、肩を抱いてお袋と手を繋いでいた。今じゃ全然考えられない姿だった。

「春は俺達の子だ。頑丈で、強い子だ。あんな病気に、やられるような子じゃないよ」

「……でも」

泣いているお袋を、さらにギュッと親父は抱きしめる。

……いいなあ、と思った。

「心配すんな、俺らがこんなんじゃ、春が病気に勝てねえだろ？だから、な？泣くなよ」

「……私がもっと、もっとあの子に気を使ってあげれば」

「……」

黙りこむ親父の顔が、とても悲しげに見えた。いつでも威張っているはずの親父の威厳が、今はなかった。

「……春、ゴメンね」

消え入りそうな、小さなお袋の声が、心の奥底を突いた。

二人しかない部屋が、妙に悲しげだった。

夜が明けた頃だろうか。医者が、寄り添っている二人の前に姿を現した。それを見て二人は、掴み掛かるような勢いで医者にすがりつく。

「ねえ、うちの子は？春は？」

少し黙って、医者は疲れたような笑みを浮かべた。二人の胸に、不安がよぎった事を、その表情から読み取った。

「……ハハ、そんな顔しなくても、大丈夫ですよ」

「じゃあ、春は……春は、生きていますね？」

返事の変わりに、深々と医者はうなずく。その顔に、疲れたような表情は、もうなかった。すがすがしい笑顔が、そこにあった。

「本当に強い子です。あんなに高熱だったのに、元気になりましたよ。今は、病室で寝ています。行って上げてください」

両親の顔に、希望の光が燈った。

ぱたぱたをスリッパを鳴らしながら、医者が言っていた部屋の戸を開ける。そこには、安らかな寝息を立てている『俺』がいた。

その姿を見て、お袋はその場に崩れ落ちそうになった。それをそっと、親父が支える。……こんなに二人って、仲良かったっけ？

そのままお袋を支えながら、『俺』の眠るベットの傍による。そして、見舞い用のイスに、力が抜けたかのように、ドスツと腰掛け

た。

「……………良かった」

「……………良かったな」

柔らかな笑みが包む顔に、気はほとんど感じられない。なのに何故、あんなに嬉しそうに笑っていられる？

お袋が、そつと『俺』の前髪を退かして、顔が良く見えるようにする。あんなに苦しそうに歪んだ顔が、今は嘘のように天使の寝顔だ。優しい手が、その頬を、頭を愛しそうに撫でていく。普段はそんな事、絶対にしなかった。それが今は、本当に頭を撫でている。

「ううん……………」

声変わりしていない声が、眠そうな声を出し、その瞳を開く。それを見て、お袋の目から、雫がこぼれ落ちた。……………嘘、泣いてる？お袋が？

「……………お母さん？お父さん？」

小さいけれど、しっかりと声が聞こえた。その声に応える二人の目から、次々雫がこぼれ落ちていく。泣いている、嬉しそうな顔して、二人が泣いている。

「どうしたの？何で、泣いてるの？」

無垢な言葉に、返す言葉がないのか、両親は何も言わない。鼻を擦る音と、嗚咽を抑える声が、狭い病室に響いては消える。両親は、こんなに脆かっただろうか。こんなに、俺の事を想ってくれていただろうか。

「泣かないで、お母さん、お父さん。どうしたの？僕に、何かあった？」

ニツコリと微笑む幼い顔は、本当に天使だ。今の俺じゃない。そう思うしかなかった。

「ねえ、どうしたの？」

「……………春」

耐えられなくなったのか、お袋は泣きながら、小さな俺を抱いて泣き続ける。そんなお袋を見て、親父はそつと小さな『俺』の手を

握りしめる。大切そうに、壊してしまわないように。

「ゴメンね、ゴメンねえ」

「お母さんも、お父さんも、どうかしたの？いい子いい子してあげる」

開いている手で、そつとお袋の手を撫でる『俺』は、無邪気な笑顔でその大きな頭を、小さな手で撫でていた。握られた手を、握り返して。

「ゴメンね、春。ゴメンね。お母さんを、許して……」

「？」

「春の様子がおかしかったのは、昨日から本当は分かったの。

なのに、なのに、」

「お母さん？」

「大丈夫だろうって、勝手に思ってたんだ。家計の事を考えたら、ちよつとした事で病院には行けなかったんだ。ゴメンね、こんな悪魔のようなお母さんを、許しておくれ」

「ダイジョーブだよ、お母さん。ダイジョーブ」

舌足らずな声は、お袋の心に届いたのか、いつそう嗚咽が大きくなった。

「春、お前が死んでしまふんじゃないかと、本当に心配だったんだ。私がちゃんとお前の事を見てやってなかったから、天罰が下ったんだって、そう思ったんだよ。私が、本当に春の事を思っているのか、神様は試そうとしたんだ。……私は、本当にお前を愛しているのに、心から、お前を愛しているのに、ちゃんと、お前を見てやれなかった。だから、だから神様は」

「お母さん、神様はね、そんなに酷くないよ？僕を助けてくれたもん」

ニツコリ笑うのは、子供ならではか。純粹な、温かな笑顔。

「……春」

「僕ね、お母さんの事、だあいすきだよ。それに、お父さんも、だあいすき！」

何で、こんなに純粹で、無垢に笑えるんだろうか、子供とは。何でこんなにも、この笑顔に癒されるのだろうか。

「……私も……春が、大好きだよ。本当に、本当に、心から、大好きよ。……死ななくて、本当に良かった。生きててくれて、お母さんに笑ってくれて、本当に良かった」

「うん！」

「……俺も、本当に好きなのか、春？」

「うん！お母さんとおなじくらいに！」

「……八八、八八八。やっぱり春は、いい子だなあ。よく笑って、よく人を想ってくれる。暖かいよ、春の心が」

「そーお？」

「ああ、春の木漏れ日みたいだ。あつたかくて、優しくて、純粹で。『春』って言葉どうりだな」

「？エへへ」

良く、言葉の意味を理解していないようだが、今の俺だったら、それが理解できた。それが、心からの言葉じゃないとしても、こんなに嬉しい言葉はない。

親父は、お袋は、この俺が産まれてきてくれた事、元気に育ってくれている事が、本当に嬉しかったんだ。生きていてくれて、心から嬉しかった。死ななくて、良かったと。

何故だろう？頬がやけに熱い。目の前がかすれて、前が見えないや。それなのに、心は躍っていやがる。何なんだよ、この矛盾。嬉しいのか、嬉しくねえのか、はつきりしろよ、俺。

本当に、心から心配してくれる人がいると思っていなかった。本当に、心から涙を流してくれる人がいるなんて、思ってたなかった。そう思ってたのに、本当にいたんだな、こういう人。

馬鹿みたいで、情けねえけど、今は、本当に家族が愛しい。あの、狭い部屋が、家が恋しい。たくさん見守ってくれている人がいる、あの家に、俺は……帰りたい。

自然に胸に当てていた手が、とても暖かい。なんだか、とっっても

懐かしい、暖かさだ。その中で、俺は声を聞いていた。

「良かった、良かった。無事に、『鍵』を見つけ出せたようですね。本当に、安心しましたよ」

「……お前は」

「忘れてくださって、結構ですよ。と、言いますか、忘れてくださいね。頼みます」

「……変な奴。」

「風海 春、思い出せましたか？大切な記憶を」

「ああ、とつても暖かい、思い出だ」

「それはそれは」

どこかで、クスクスと笑う声がある。近いのか遠いのか、よく分からない。

「……これで、貴方は死ぬ理由はなくなりましたね」

「……そういえば、俺は、死のうとしてたんだっけ？……八八、今考えれば、馬鹿みたいだな。自分が笑えてくる」

また、少し特徴的な笑い声がある。

「その『鍵』があれば、いつ、どんな時でも再び心の扉を開く事ができます。失くす事がなければ、いつでも」

「……」

「私の役目は、ここまでです。これで、貴方とはお別れですね」

「……また、会えんだろ？」

くすぐられた時のような笑い声が、すぐ傍で聞えた。なんだか、ホツとする。

「いいえ、会えません。いや、会わないかもしれないと言う事が、一番当たりに近いかもしれませんね」

「んだよ、それ」

「ふふ、そういう事です。私の役目は、貴方に『鍵』をお渡しする事。それ以外、何もないのです。そして、また貴方が『鍵』を失くした時、私は再び貴方と会う事になるでしょう」

「……それって、いい事なのか？悪い事なのか？」

「うーん、両方ですね。会える事は嬉しいですが、また『鍵』を失くす事は、非常に悲しい事。もう、失くしては欲しくありません」あの男の笑みが、薄っすらと見えた気がした。でもやっぱり、顔は見えない。

「……では、またお会いしない事を祈って。その『鍵』を大切に」その声に誘われるようにして、俺はあの帰り道で目が覚めた。

*

あの時の事は、今もはっきりと覚えている訳じゃない。特に、男の事。どんな格好をして、どんな顔をしていたのか、ぼんやりとしか出てこない。

けど、その代わりにはっきりと見えるのは、あの日の記憶。今まで思い出せなかった、大切な記憶。俺に、生きると、生き続けると教えてくれた、あの記憶に関しては、はっきりと見えるのだ。瞼を閉じればすぐ、ホラ、もう見えてきた。

あの日からもう、自殺なんて考えなくなった。馬鹿らしくなったからだ。せっかく、こんなにも自分を愛してくれる人達がいるのに、感謝もしないでこの世を去るのは、ちょっと失礼な気がしたから。もともとずっと長く生きて、親孝行してやらないと、あの時の恩は返せない。あの時の愛情も、返せない。

何となく、心細くなったりする時は、こうやって、胸元に手を置く。そうすると、あの不思議な『鍵』の暖かさが、手元まで届いてくるような気がしたから。そこにある、大切な『鍵』が、ここにある事が、本当に嬉しかった。

……もし、あの男に礼を言えるのなら、言わせて欲しい。

失われた『鍵』を、見つけてくれて有難う、と。

もう失くさない、と。

(後書き)

初の短編&シリアス系です！そうでしたか？ものすごく変なところとか、ありませんでしたか？

と、まあ、そういう事はいいとして。『Lost the Key』、楽しんでいただけたでしょうか？少し長くなってしまった気がするんですが、どうでしょう？もしよかったら、評価、お願いします。あ、よかったら、感想も……。

これは、一瞬の閃きさえあれば連載できたんですが、めんど……無理そうだったので短編とさせていただきました。もしかしたら、気が向いたら続きのようなものを書きたいと思っているので、その時はよろしく願います。

では、皆様、さようなら。どうか、大切な『鍵』は失くさぬように……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6053d/>

Lost the Key

2010年10月28日02時56分発行